

特定課題研究「選択体系機能言語学による 日英均衡バイリンガルのコードスイッチングの 言語構造の研究」研究経過報告書

難波和彦*

要旨

日英均衡バイリンガルのコードスイッチングを言語構造の面から説明するために、選択体系機能言語学の3つのメタ機能（経験的意味機能、対人的機能、テキスト形成機能）の面から分析する枠組みを構築することが研究の目的である。文中で大きく2言語が切り替わる alternation パターンの CS について、過程=Process と叙法=Mood については繰り返しが行われており、主題=Theme については行われていないことが示された。

キーワード：コードスイッチング、バイリンガリズム、選択体系機能言語学、交替、3つのメタ機能

1. はじめに

本報告は特定課題研究（準備研究支援）として助成をいただいた「選択体系機能言語学による日英均衡バイリンガルのコードスイッチングの言語構造の研究」の経過を報告するものである。

日英均衡バイリンガルが、日本語と英語を切り替えながら、談話を進める現象であるコードスイッチング（Code-switching, この後 CS と表記）について、従来の研究では、「なぜ CS が起こるのか」について社会言語学・語用論的視点から分析する場合（Gumperz 1982, Auer 1998 等）と、「どのように CS は起こるのか」について分析する文法・語彙など言語構造面の視点から分析する場合（Myers-Scotton 2002, Muysken 2000 等）に分かれていた。本研究では、言語構造的な分析を研究目的の中心に据えるが、社会言語学・語用論的な要因も CS の言語構造に影響があるという認識のもとに、包括的な視点から、CS は何らかの法則にのっとった、説明可能な現象であることを証明しようとするものである。今回の特定課題研究では、これまでの研究から得られたデータを対象にして、選択体系機能言語学の中の3つのメタ機能の面からの分析を試みた。

* 京都産業大学外国語学部

2. 研究の学術的背景

(1) コードスイッチングの言語構造分析

複数の言語を切り替えながら会話を続けて行く現象＝コードスイッチングは、バイリンガル（特に均衡バイリンガル）同士の会話によくみられる特徴の一つである。バイリンガルが複数言語を切り替えて会話しているのを聞くと、その言語運用能力に驚く半面、「間違っただけをしている」「言語発達に悪影響があるのでは」といった懸念を感じることもある。例えば“I want to be ゴールキーパーになりたい”（Namba, 2012）という文は、英語としても日本語としても規範文法上は間違いであるが、バイリンガル同士の会話ではこうしたコードスイッチングが基準となっている場合があり、そこには一定の言語学的法則性があることが感じられる。この時、二つの言語の文法に何が起きているのか、なぜ英語-日本語を切り替えているのか、どのような形、部分で切り替えているのか、といった疑問が湧いてくる。

CSに関するこれまでの研究は、例えば「話し相手や状況が変わることによって切り替える」のようにCSを説明する社会言語学的・語用論的アプローチと、「名詞など内容語の部分で切り替えが起りやすい」のように文法構造からCSを分析するアプローチが取られてきた。

このうち、文法構造からの分析に関しては、一方の言語が主になって（母体言語）、もう一方の言語（埋め込み言語）がそこに挿入される insertion（挿入）とよばれる仮説が示され（Muysken, 2000）、その詳細な説明のために、「母体言語フレームモデル（MLF/Matrix Language Frame Model）」（Myers-Scotton, 1997, 2002）などが提案されてきた。

一方上記の“I want to ~”の例文のように、日本語、英語のどちらが主ということではなく、言語外の要因、たとえば話し相手が変わるなどの理由で、主になる言語そのものが、そこで大きく切り替わる alternation（言語の交替）が起きているという見方もある（Muysken, 2000）。ここでは、“ゴールキーパー”という借用語が、triggering（ひきがね作用）を起こして（Clyne, 2003）、英語から日本語への alternation が起きていると考えられる。

言語類型論的に距離のある日本語-英語間のコードスイッチングはとりわけ興味深い。SVO 語順の英語と SOV 語順の日本語のコードスイッチングでは、“want to be”と“になりたい”が同一文内に現れる上記の例文のように、同じ内容を表す動詞が繰り返されるが、文法的な語順は、それぞれの言語のルールに沿っている（Chan, 2009）。実際のバイリンガル話者は、言語間の文法の差を意識して発話しているわけではないが、二つの言語がぶつかった時には、文法構造的な要因と、社会言語学・語用論的な要因の両者が影響して言語の切り替えが起きていると考えられる。したがって、「なぜ」「どのように」コードスイッチングが起るのかという問いに答えるには、文法理論と社会言語学的・語用論的視点のいずれをも包含した理論的枠組みが必要である。

(2) 選択体系機能言語学

文法理論と社会言語学的・語用論的視点のいずれを含んだメタ・レベルの理論的枠組みとして、

Halliday (1994) の「選択体系機能言語学 (SFL/Systemic Functional Linguistics)」が応用しうると考える。SFL は、一つの文において複数の意味が重層的な機能を持つとし、「3つのメタ機能」の視点から文を分析する。それらは、① 経験構成的機能（誰がどこで何をしているのかなど、意味そのものの）、② 対人的機能（情報や行動などを話し相手に与えているのか、要求しているのか）、③ テクスト形成的機能（前の文からディスコース・マーカーなどで、どのように文がつながり、その文のなかでトピックとなっているものは何か）の3つの視点である。

3. データ分析

ここで、均衡バイリンガルの自然な会話を録音したデータに現れたコードスイッチングの例を使って、実際に SFL で分析してみる。

(1) データ

帰国生徒受け入れを専門とする国際学校の高校生が、トピックを決めて自然な会話をしたものを録音し書き起こしたものの中から、CS を使っている文を抜き出す。

(2) SFL による分析

CS 文を SFL の3つのメタ機能の面から分析すると、どうなるのか以下に示してみる。“だって in my background there was アスパラとかあったからさ”という英語と日本語で切り替えが起こっている文であれば、つぎのような分析が可能である。

		だって	in my background	there	was	アスパラとか	あった	から さ
経験構成的機能	英		circumstance		existential process			
	日					existent	existential process	
対人的機能	英			subject	finite			
				mood				
	日					complement	predicator	negotiator
						mood		
テキスト構成的機能	英		topical					
	日	textual						
		theme			rheme			

- ① 経験構成的機能では、存在を表す existential process（存在過程）になっており、存在する物を示す existent は日本語 “アスパラとか”，何が起きているのかを示す process にあたる動詞部分は、英語と日本語で同じ “存在” を表す “was” と “あった” とが繰り返されている。
- ② 対人的機能では、対話相手とのやりとりを示す mood に注目してみると、ここでは情報を相手に

伝える declarative mood が、英語と日本語の両方で表現されている。英語の subject (主語) + finite (定性) の語順で表される mood と違って日本語は、predicator (述語) + negotiator (交渉詞) が mood を表現するのに使われ、語順は関係しない。

- ③ テキスト構成的機能の面から見ると、前の文脈からの談話の流れを示す textual theme は、日本語のディスコースマーカ―“だって”が使われており、一方この節の話題の主題を示す topical theme は“in my background”と英語が使われて、日本語と英語のそれぞれ違った役割の theme の組み合わせとなっている。

この例文は、母体言語が英語なのか日本語なのか判断が難しい文であるが、SFL を用いた分析では、経験構成的機能の主要要素である process と対人的機能の主要要素の mood の部分が英語でも日本語でも繰り返されていて、この2条件をもって、母体言語が切り替わる alternation が起こっているという判断基準とできる。テキスト形成機能に関しては、ここでは、文脈の流れを示す textual theme が日本語の insertion として挿入され、この節の主題となる topical theme は英語で表されている。textual theme と topical theme の間で切り替えが起こりやすいのかどうか、さらに theme 全体と、その他の部分である rheme (題述) の間での切り替えもデータではよくみられるので、検証の対象となる。日本語と英語の alternation が起こっている時には、重複が起こっても、同じ意味(経験構成的機能)や文法的要素(対人的機能)を繰り返し、テキスト構成的機能に関しては、主題の繰り返しは起こっていないということがわかる。

4. 研究の経過

日英均衡バイリンガルのコードスイッチングの構造面についての研究は、Namba (2009, 2012) などに取り組んできたが、難波 (2015) では、SFL の観点から分析を取り入れ始め、3つのメタ機能のうち、対人的機能とテキスト形成機能の視点から分析をしたものを発表した。その後病気で中断をした数年間の期間を経て、研究を再開したところである。

今回の研究で、経験構成的機能の視点からの分析も始め、SFL の理論を包括的に使った分析を始めることができた。ひとめではわかりにくい複雑な構造をしている2言語から成り立つ CS を、3層のメタ機能から分析するという作業であるので、労力がかかることになるが、日本語と英語の CS の中でも、特に文の途中で大きく言語が交替をする alternation について、より緻密な分析・説明ができることがわかった。

5. 今後の研究の展開

SFL による CS そのものの研究例が他にないので、どのようなパターンがあるのかをめいかにするために、分析の量を増やして行く予定である。CS の研究は、話し言葉によるものが多く、書き言葉についての研究は少ない。話し言葉は、書き起こし作業が必要になってきて、特に CS の書き起こしは、困難を極めるところがある。一方書き言葉については、その書き起こし作業が不要であると

いうメリットはある。CSの分析という観点からすると、どちらの言語が、どの部分で切り替わっているのかが、はっきりしている。今、コミュニケーションのデフォルトともなってきたり、CMC (computer mediated communication) のデータ、例えば SNS でのやりとりなどは、話し言葉のような即興性、リラックスしたときの会話といった、話し言葉の特徴があり、形式的には書き言葉、厳密にいうとスマートフォンなどに打ち込んだ言葉であり、書き言葉の利点ももっている。ここから CS のデータを得て、研究していくことは、さらに研究の幅を広げていくことになっていくと考えられる。

参考文献

- Auer, P. (1998). *Code-switching in conversation : language, interaction and identity*. London ; New York: Routledge.
- Chan, B. H. (2009). Code-switching between typologically distinct languages. In *The cambridge handbook of linguistic code-switching*, ed. B. E. Bullock and A. J. Toribio. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clyne, M. G. (2003). *Dynamics of language contact*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge [Cambridgeshire] ; New York: Cambridge University Press
- Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar. 2nd ed.* London: E.Arnold.
- Muysken, P. (2000). *Bilingual Speech: a typology of code-mixing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers-Scotton, C. (1997). *Duelling Languages: Grammatical Structure in Codeswitching*. Oxford: Oxford University Press.
- Myers-Scotton, C. (2002). *Contact Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Namba, K. (2009). A continuum-based model for insertional code-switching: Japanese nominal insertions in English matrix language frames. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism* 15, no. 1: pp.18-40.
- Namba, K. (2012a). *English-Japanese Code-switching and Formulaic Language: A Structural Approach to Bilingual Children's Interactions*. Saarbrücken: Langert Academic Publishing.
- 難波和彦. (2015). 対人的メタ機能とテキスト形成的メタ機能の観点からの日英コードスイッチングの分析. *Proceedings of JASFL* 9, pp.15-24.

A study on the structure of Japanese-English balanced bilinguals' codeswitching from the perspective of Systemic Functional Linguistics

Kazuhiko NAMBA

Abstract

In order to develop a framework for analyzing the structure of Japanese-English balanced bilinguals' code-switching, the perspectives of experiential, interpersonal and textual meta-functions of Systemic Functional Linguistics have been employed. Regarding the alternational CS in which two languages are switched in the middle of the clause, it was shown that repetition takes place for Process and Mood, but not for Theme.

Keywords : code-switching, bilingualism, Systemic Functional Linguistics, alternation, three meta-functions